

平成二十五年七月一日発行 第二十三巻第七号 通巻第一六五号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐

かい

平成25年7月号

岡井省二創刊



# 克己

高橋将夫

春塵も付加価値なりし古本屋  
泣く母を見た記憶なし葱坊主  
死に仕度一度は済ませ母のどか  
移りゆく命の姿繭の中

春の蝶蛹のころを懐かしむ  
大木の小枝をゆらす春の風  
最期とは散ることならず山桜  
囀は心を開くマスターキー  
抓むだけなら薔薇の芽も許しさう  
なんとでも理屈はつくよ朧影  
克己とは耕すことでありにけり

# 槐安集

水野恒彦

諸鳥のこゑの専もはらや花供養  
砂の中へ愛を埋めて春渚  
養花天出藍の夢いくつまで  
藤の下過去一切の透きとほる  
いまここを立ち去る亀の鳴けるなり

延広禎一

祝一如意輪宝珠一上梓  
駘蕩として春月と如意宝珠  
天籟や岐阜蝶の羽化はじまれる  
鏡面に何も写らぬ小町ノ忌  
磯巾着むすんでひらく祇園かな  
今年竹一節ごとに一途なり



加藤みき

団子虫の一家息災夏に入る  
エレベーターに赤子の匂ひ春の暮  
花冷やのんちやんに聞く雲のこと  
腰折れ松の姿ととのふ夏はじめ  
別れ霜芻草熟しぬたりけり

石脇みはる

春の山大風呂敷をひろげけり  
飴玉はレモンの味す青嵐  
結界に石一つあり花曇  
茶の新芽髪にかざして摘みにけり  
今日よりは臈月なりけり山川も

中島陽華

約束の社日詣やりんご飴  
金時人参買ふや紙吹雪舞ふ  
海髪干してあり狎が雀躍りす  
額の手は鉄観音へ春のくれ  
稜々の青石塔婆春の虹

雨村敏子

日と月が廻り平郡の花なづな  
花傘をくるくる廻し比良坂へ  
たけくまの松の雨なり円位の忌  
億光年翔けてガイアに囀れる  
丑三つの桜吹雪と後シテと

竹内悦子

波羅密の橋渡りくる黄砂かな  
梅の仁硯と墨と文鎮と  
身心を忘れてきたるさくらかな  
途中から迷子になりぬ桜餅  
棟梁や寺に大判小判草

本多俊子

子規いまだ学び足らざる柿若葉  
夕桜母に合ひたくなりにつけり  
池に波なく睡蓮一花夢もらふ  
ブルースは海に流れて春の星  
花吹雪浴び少年の深き眉

近藤喜子

転生を喜ぶ蝶々ふはと舞ふ  
仔猫抱く少年の背にある孤愁  
此処にいま生きて在ること蜃気楼  
引く波に春の愁ひのありにけり  
春月に触れきし十指みづみづし

谷村幸子

春灯すがた美し菩薩像  
持ちくれし壬生菜をほめて五色飴  
大樟の枝きる匂ひ寒諸子  
塑像あり多羅葉の花みそびれし  
手をかざし春日のぬくみたしかめる

瀬川公馨

花の雨くれなゐ夙に老い至り  
四次元のうたかたを食む白楊  
穂の芽のいぢらしきかなムール貝  
面癬の一端なりき鮭五郎  
鋸引くや鍾馗さんの武者震ひ

久保東海司

囀りや無口の男うとまれて  
手漕ぎ船湖に出払い風光る  
税申告終へ風花の舞ふ街へ  
和菓子好き中でもとくに桜餅  
シヤボン玉笑つてゐては膨らまず

中野京子

布袋尊境内一円風光る  
日も月も帰るとこあり花菜道  
地は暮れて白木蓮の華燭かな  
存へて穀雨の縁かさねぬる  
地震のあと色さしてくるさくらかな

柳川 晋

天上の光ひき連れ散る桜  
孔明の術にかかりし花筏  
春月に瞬きもせで見られける  
身中に乗込鮎に群れるもの  
行く春の尻尾の見ゆる夕べかな

岩下芳子

浜寺の風に浮かれし松の花  
常若の伊勢の森なる三光鳥  
佐保姫の領布ひ振る風の立ちにけり  
初鯉こ蕈火の上に炙りたる  
鬼瓦の口に出這いり雀の子

近藤紀子

文鎮に温み覚ゆる日和なり  
ふらここに腰かけひとり楽しむ  
草の名を二つ覚えし日永かな  
宗祇水に浮く花びらの色の濃し  
円空佛おん目のやさし鐘おぼる

# 槐市集

中島昌子

囀に笑うてをりし埴輪かな  
弧を描く棚田の畦の濡れてをる  
から傘をバリツと開く春時雨  
渋滞の真上をゆける紋黄蝶  
蔵朽ちし代官家敷朧月

中田禎子

少女らの声とスキップ芝桜  
一群の茅花の残る売地かな  
春灯や見覚への無き傘一本  
掛持ちの通夜終へにけり花菜漬  
惜春やそれぞれ膝に猫のゐて

中谷富子

生え初めし齒に春の日や稚を抱く  
草団子戦争知らぬ人ふえて  
犬好きが猫好きとなる恋の春  
約束を端から忘る目借時  
貝寄風やシルクロードを行く駱駝

中堀倫子

篝火に桜とけこむ山め道  
春眠や睡魔の深き大都会  
囀や空のふくらむ心地よし  
連山の起伏を走る春の水  
春の日に話し上手な客来たる





# 槐集

## 高橋将夫選

淡海より京みやこへのぼる花筏  
枚方 熊川 暁子

しまひおく言葉のありて花の冷え  
大阪 有松 洋子

日を掴み日を離すかに種を蒔く  
遠眼鏡やはりをんなに春がある  
馬鹿になることむづかしき四月馬鹿  
耕して耕して去る過疎の村

花の雨過去をやさしく封印す  
花篝枝垂れの先の黄泉に触る  
濡れてゆく屋根と落花とたましひと  
春嵐黒鍵強くひびかせる

誰彼に花時のあり一生かな  
岡崎 岩月優美子

暮の春心音女医にきかれたる  
宇治川を渡れぬ胡蝶吾にきし  
喜屋川 山根 征子

惜春や夢引き戻したきことも  
螢烏賊何カラットのダイヤかな  
春愁や波の百態ふつつつと  
生ぎるとは逃水を追ふごとくなり  
ひそやかに翼ひろげし嶺ざくら

寺田すず江

柳絮とぶ今日は新聞休刊日  
山桜に年々の貌ありにける  
目に青葉よさこい土佐の皿鉢かな  
虚と実の同窓会の春の宵  
大阪 江島 照美

音を消し桜の下に佇めり  
燃えつきし生命いのちたふとし養花天  
法螺の音の渡つてきたる灌仏会  
喜びも怒りも超えて春の潮

天井の籠の見詰むる涅槃像  
花屑をそつと掬ふて男の手  
三分咲きの少女のやうな梅の香よ  
人死して山のありけり木の芽時

# 銀河往来 高橋将夫

## ◇「槐集」 照照

淡海より京へのぼる花筏 熊川 暁子  
花筏が淡海から京へのぼるといふ。琵琶湖疏水もこう詠ま  
ると、なんとも詩情たっぷりではないか。素晴らしい。

「日を掴み日を離すかに種を蒔く」へ耕して耕して去る過疎の  
村」の句では、広々とした農村の景が目につかぶ。とくに「耕  
して耕して」のリフレインは田畑に生涯をささげた耕人の姿を  
端的に言いとめていて、過疎の本質に迫っている。

「遠眼鏡やはりをんなに春がある」の句、佐保姫ではないが、  
やはり春を司るのは女性なのだろう。へ馬鹿になることむづか  
しき四月馬鹿、確かに馬鹿になりきたらたいしたものであ  
る。

誰彼に花時のあり一生かな 岩月 優季  
自分では不幸の見本だと思っている人でも、端から見ると  
けっこう花のある生涯だったのではないかと思うことがある。  
逆に、端から見ると不幸の見本みたいな人でも、本人は案外と  
花のある生涯だったと思っているかもしれない。人それぞれに  
それなりの花時があるのだろう。へ生きたら逃水を追ふこと  
くなり」の句も、生涯を見つめた一句。

「螢鳥賊何カラットのダイヤかな」光る螢鳥賊をダイヤと比  
較しているところが面白い。本当に何カラットになるんでしょ  
うかね。

ひそやかに翼ひろげし嶺ざくら 寺田すず江

人知れず咲き誇る嶺のざくら。「翼ひろげし」の若さにあふ  
れた表現に共鳴した。へ喜びも怒りも超えて春の潮」も青春の  
息吹を感じさせる。

濡れてゆく屋根と落花とたましひと 有松 洋子  
「屋根↓落花↓たましひ」の表現が実から虚、客観から主観  
の世界へと巧みにいざなう。

へしまひおく言葉のありて花の冷えへ花の雨過去をやさしく封  
印すへ花籠枝垂れの先の黄泉に触る、どの句も作者の精神世  
界が見事に表現されている。「仕舞い込んだ言葉」「封印した過去」  
は誰にでも、一つや二つ心あたりがあるだろう。

暮の春心音女医にきかれたる 山根 征子  
女医さんに聴診器で診察されただけの話だが、いかにも心を  
聴き取られたかのように愉快。へ宇治川を渡れぬ胡蝶吾にきし  
の「吾にきし」、へ目に青葉よさこい土佐の皿鉢かな」の「皿鉢」  
は作者ならではの視点。

虚と実の同窓会の春の宵 江島 照美  
「虚と実」ときて、何かと思ったら同窓会の情景だという。  
このギャップがいかにも俳諧。他に、へ天井の龍の見詰むる涅  
槃像へ人死して山のありけり木の芽時」。

眼を覚ます楽しみもありものの種 九童庵 玄  
春は種が長い眠りから覚めて芽吹く。種の可能性をしかと言  
いとめた一句。